

生活や遊びの中での音や音楽に着目した  
子どもの表現活動における支援のあり方についての検討  
—初任者を対象とした「岡崎市定期講座講習あそび講座」を通して—  
Examining the nature of supporting the expression activities of  
children, focusing on sounds and music in daily living and playing  
—Based on “Asobi (Play) Course: Okazaki City Fixed-Term Course and  
Training Program” for beginning childcare workers—

滝沢ほだか<sup>\*</sup>・平尾憲嗣<sup>\*</sup>・北浦恒人<sup>\*\*</sup>・西川由美子<sup>\*</sup>

TAKIZAWA Hodaka, HIRAO Noritsugu, KITAURA Tsuneto, NISHIKAWA Yumiko

要 旨：

本研究では、生活や遊びの中での音や音楽に着目し、子どもの表現活動を支援するあり方について検討することを目的とする。具体的には、保育士初任者を対象とした研修「岡崎市定期講座講習あそび講座」について、生活や遊びの中での音や音楽に着目して講座設計を行い、音楽あそび講座が受講者の保育における音楽に関わる活動に対する意識にどのような変化を与えたのかについて、講座設計の効果検証を行った。また、今後の保育者養成へ結びつく視点についても、同時に検討を行った。質問紙による意識調査の結果、講座を受講することで「日常の保育に音楽に関わる活動を取り入れること」「音楽に関わる活動の指導計画の立案」「子どもと音楽あそびを通して遊ぶこと」に対する自信が有意に高まったことが明らかとなった。このことにより、生活や遊びの中での音や音楽に着目し、子どもの表現活動を支援する力を育成する講座設計について有効性が示唆された。

Abstract

The objective of this research is to examine the nature of supporting the expression activities of children, focusing on sounds and music in daily living and playing. Specifically, in a training course for beginning childcare workers called the “Asobi (Play) Course: Okazaki City Fixed-Term Course and Training Program,” course design was carried out focusing on sounds and music in daily living and playing. Then, the effectiveness of the course design was verified based on how the Music Asobi (Play) Course changed the awareness of the participants regarding music activities during childcare services. At the same time, how to connect the findings with the cultivation of childcare workers in the future was also considered. The results of an awareness survey utilizing a questionnaire showed that taking the course significantly increased confidence with regard to “incorporating musical activities into day-to-day childcare,” “establishing teaching plans for musical activities,” and “playing with children based on music asobi (play).” The research thus suggested effectiveness with regard to course design fostering the ability to support the expression activities of children focusing on sounds and music in daily living and playing.

キーワード：遊び 表現活動、音や音楽、初任者研修 定期講習

Keywords : play, expression activities, sounds and music, beginning childcare workers, fixed-term course

---

<sup>\*</sup>岡崎女子短期大学幼児教育学科 <sup>\*\*</sup>岡崎女子大学子ども教育学部

## I. はじめに

保育所保育指針（2008）と幼稚園教育要領（2008）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2014）に示された領域「表現」では、豊かな感性や表現する力を養うことが記されており、「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」ことをねらいの1つとしている。これらの現状を踏まえて文部科学省幼児教育部会における審議の取りまとめ（幼児教育部会 2016）では、次期幼稚園教育要領に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿」として、「みずみずしい感性を基に、生活の中で心動かす出来事に触れ、感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲が高まるようになる」という姿が示された<sup>1)</sup>。さらに、これらの姿を具体化した項目として、①生活のなかで美しいものや心を動かす出来事に触れ、思いを膨らませ、様々な表現を楽しみ、感じたり考えたりするようになる、②生活や遊びの中で感じたことや考えたことなどを音や動きなどで楽しんだり、思いのままにかいたり、つくったり、演じたりなどして表現するようになり、友達と一緒に工夫して創造的な活動を生み出していくようになる、③自分の素朴な表現が先生や他の幼児に受け止められる経験を積み重ねながら、動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの喜びを感じ、友達と一緒に表現する過程を楽しみ表現する意欲が高まるようになる、という3点も同時に示された。①、②に「生活のなかで」「生活や遊びのなかで」と直接的に示されているように、今後目指していく子どもの姿として、生活や遊びの中で、豊かな感性や表現を育てていく必要性がさらに重視されていく方向が示唆されたといえる。

このことにより、保育者養成課程においては、生活や遊びの中で子どもの表現活動を支援することができる保育者養成が急務であると同時に、現職の保育士や幼稚園教諭、保育教諭に対しても、そのような表現活動を支援する方法を伝えていく必要がある。無藤ら（2008）は、「表現は子どもの生活のあらゆる場面にちりばめられている。園生活の全般にわたって多様な体験をすることが、子どもの表現の基盤となる」とする一方、「子どもの感性を育てるには、子どもの豊かな感性に気

づき、それを受け止める保育者が、その感性を表現する意欲を子どもの中に育てる。子どもの表現に心を開き、驚いたり見守ったりする保育者が、子どもにもっと表現したいという気持ちを起こさせる」とし、保育者が子どもの感性に気づいて受け止めることの重要性を示している<sup>2)</sup>。

これらを踏まえて、本研究では、生活や遊びの中での音や音楽に着目し、子どもの表現活動を支援するあり方について検討することを目的とする。具体的には、保育士初任者を対象とした研修「岡崎市定期講座講習あそび講座」について、生活や遊びの中での音や音楽に着目して講座設計を行い、音楽あそび講座が、受講者の保育における音楽に関わる活動に対する意識にどのような変化を与えたのかについて、効果検証を行う。また、今後の保育者養成へ結びつく視点についても、同時に検討を行う。

## II. 「岡崎市定期講座講習」の概要

本講習は岡崎市と岡崎女子大学・岡崎女子短期大学連携協議会より、保育者定期講座講習の実施協力依頼を受け、平成28年度より委託事業として実施することとなった。今年度は「あそび講座」として、表現領域である運動・造形・音楽に関する活動を取り入れ、受講者がこれまでに習得した知識・技能を基に講習を受けることで、これからの保育実践に活かすことのできるよう講座設計を行うこととなった。

講座を担当する教員については運動・造形・音楽各分野の担当教員2～3名と、保育現場経験のある実習担当教員1名をチームとし、理論と実践が結びついた講座となるよう構成された。

岡崎市と本学との話し合いにより定められた本講習の目的は次の3点である。まず1点目は保育現場に勤務する保育者も養成校の教員も共に「あそび」について深く考え、理論と実践が結びつく工夫をすること。2点目は保育者と教員が交流することによって、相互に保育現場の現状を理解し、よりよい保育実践をめざしていくこと。3点目は何より子どもがもっと遊びたくなる、保育者にとっては組立て甲斐のある保育内容を構築することである。

受講対象者は正規または嘱託経験3年以内の岡崎市立保育園勤務者73名で、4回の講座が開催

された。第1回は平成28年5月20日(金)の17:00～19:00、第2回は平成28年6月17日(金)の17:00～19:00、第3回は平成28年8月18日(木)の17:00～19:00、第4回は平成28年9月9日(金)の17:00～19:00に行われた。第1回講座は旅芸人の福尾野歩氏によるあそび講座が行われ、第2回講座から第4回講座は受講者を3グループに分け、運動・音楽・造形の各講座をローテーション方式で受講することとした。

### Ⅲ. 音楽講座の概要

#### 1. 音楽講座の目的

I.はじめにで示した研究の背景と、IIで示した「岡崎市定期講座講習」の目的を踏まえ、あそび講座(音楽)の目標を、①保育現場における音楽に関わる活動をふまえて、保育者が創造性をもって子どもの音楽表現を引き出す活動について、理論と実践を結びつけること、②子どもの発達に応じ段階的に積み上げる音楽に関わる活動を取り入れることで、子どもの心情、意欲、態度を養い、発達段階に即した音楽あそびを体得すること、として設定した。

#### 2. 講座設計

講座実施にあたり、事前に本講座に求める受講者のニーズや現在現場で行われている活動の内容を把握するため、岡崎市の保育職で活躍する保育者が、音楽を用いた保育活動において、様々な活動における現場での問題を具体的に振り返る事前質問紙(図1)とワークシート(図2)をつくり、回答を求める。ワークシートは、日常の音楽あそびの実践を各自が振り返りながら記入できるように設計し、活動が行われた日時、使用した音楽、場面、子どもの様子、ねらい・内容についての記述を求めた。

設計した講座における全体の流れを図3に示す。2回目～4回目の流れは、下記のとおりである。

①知っている(聞いたことがある)わらべうた全てに丸を付けてください  
かごめかごめ おべんとうぼこ ちゃつぽ  
なべなべそこぬけ はないちもんめ

②あそび講座(音楽)に期待することはなんですか。期待する順に【】に1～7(その他がある場合は1～8)まで番号をつけてください  
【】たくさん音楽あそびについて学びたい  
【】1つの音楽あそびについてじっくりと学びたい  
【】楽器あそびについて学びたい  
【】リズムあそびについて学びたい  
【】幼児曲について学びたい  
【】わらべうたについて学びたい  
【】音楽づくりについて学びたい  
【】その他

③音楽に関わる活動で、困った経験があれば教えてください。

④次の質問について、あてはまる番号に丸をつけてください  
\* 日常の保育のなかで、音楽に関わる活動を取り入れることは?  
1 全くできない 2 ややできない 3 どちらでもない 4 ややできる 5 とてもできる  
\* 音楽に関わる活動を取り入れた指導計画を作成することは?  
1 全くできない 2 ややできない 3 どちらでもない 4 ややできる 5 とてもできる  
\* 子どもと音や音楽を通して遊ぶことは?  
1 全くできない 2 ややできない 3 どちらでもない 4 ややできる 5 とてもできる

図1 事前質問紙調査の項目

2・3歳児 あそび講座(音楽) ワークシート

第1回 5月10日(金) 必修  
第2回 7月29日(金) 必修  
第3回 8月31日(水) 必修

園名( ) 氏名( )

実施日 園名「」	場 面	子どもの様子	ねらい・内容
例 5月10日(金) 「大きなトンネル のまなとん本丸」	廊下を走らないように トイレに行くとき	♪ ガッタンゴットン と～ボコボコを歌いながら 走る♪ 歩く	「保育学や発達と一線 にすることを楽しむ」
1 月 日( )			
2 月 日( )			
3 月 日( )			
4 月 日( )			
5 月 日( )			
6 月 日( )			
7 月 日( )			
8 月 日( )			
9 月 日( )			
10 月 日( )			

図2 ワークシート

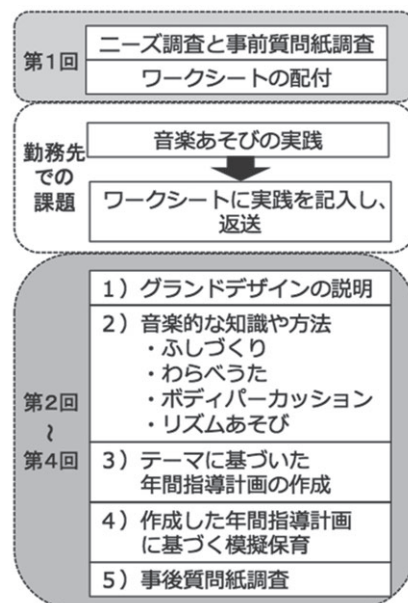


図3 設計した講座全体の構成

### 1) グランドデザインの説明 (10分)

受講者に示したグランドデザインを図4に示す。グランドデザインとは、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(2014)の内容の取り扱い<sup>3)</sup>を基にイメージした研究構想図であり、どんな研究をするのか、どのような力を育てていくのか、また研究の着地点はどこなのか、過程を意識し、他の人にも伝えやすいように分かりやすく図示したものである。毎日の保育の中で日々行われている活動が、園で掲げる総合的なねらいや子どもの成長にどのように関わっているかの意識づけを明確にし、その活動が到達目標に向け、どのような過程で行われているかを考え、子どもの発達段階を理解した上での音楽を用いた保育活動について考えを深めることの大切さについて講義を行う。また、受講者が予め保育現場で実践したワークシートをまとめて製本して渡すことで、他者の実践をヒントにしなが、自分の実践をグランドデザインに結びつけることの大切さについて考える。



図4 グランドデザイン

### 2) 音楽的な知識や方法 (20分)

次に、活動において子どもからの様々な表現を引き出す上で必要とされる音楽的な知識や方法について視野を広げるため、普段の活動を想定して必要と考えられる、ふしづくり、わらべうた、ボディパーカッション、リズム遊びの4つの音楽表

現に着目し、基本的知識を伝達し、活用方法を紹介する

・ふしづくり：子どもたちや先生が保育園または幼稚園などでの日常生活において、よく使う言葉や呟き(例:おはよう、いただきます、ありがとう、なんで、もっと等)を取り上げ、言葉のリズムとイントネーションを調べ、リズム譜で表現し、節をつける。説明では、「こんにちは」を例に、和音(長三和音、短三和音、減三和音、増三和音)、リズム、拍子、強弱等、音楽の要素を変化させることで言葉の印象が変わることを、ピアノ伴奏に合わせて受講者が声に出すことにより体感として印象づける。

・わらべうた：わらべうたの歴史的変遷について資料を用いて説明すると共に、音楽的特徴(2拍子や4拍子の単純なリズム、ヨナ抜き長音階やヨナ抜き短音階について)を一音ごとに分離したオルフ楽器の鉄琴を用いて、実際の音として体感する。事前調査で知っているかどうか尋ねたわらべうたについては、楽譜を基に説明を加えることとした。また、岡崎地方に昔から伝わる子守唄を取り上げ、ふしを感じて歌う。

・ボディパーカッション：身体の様々な部位(おなか、ひざ、すね、胸、おしり、足踏み、両手を交差して肩を叩く、ジャンプ等)を楽器として使うことを資料の図を基に説明する。また、子どもに馴染みのある4拍子の基本リズムパターンを示し、受講者全員でボディパーカッションを用いたリズムリレーをすることで、まねっこリズムあそびを体感する。

・リズム遊び：2歳児と3歳児の4~5月と6~8月について、子どもの発達とねらいをふまえて、日常生活や遊びの中からどのようなリズム遊びをとりあげるかについて、好きな遊びと、学級みんなで行う活動をわけて考えを深める。

### 3) テーマに基づいた年間指導計画の作成 (60分)

2)で学んだ音楽的な知識や方法を保育での活用に向けた応用力を養うため、受講者5名で1グループ(合計5グループ)を組み、グループごとに担当年月を設定して、担当部分の年間指導計画を作成する。作成する年間指導計画の枠組みを図5に示す。2)で説明した資料、配布したワークシート集、受講者それぞれの実践を基に、子どもが自ら選んで行う活動と学級のみんなで行う活動を、生活や遊びの中にある音や音楽に着目して記述す

2歳児の年間指導計画の作成

グランドデザインを基に、1年をいくつかに分けて、計画を立ててみましょう。  
今回は、「自ら選んで行う活動の場面」、「学級のみんで行う活動の場面」とあえて分けて表してみました。  
2歳児は繰り返すなかで、『やってみようかな』と心が揺れ、保育者や良縁で体を動かしていくうちに、意欲が高まり、楽しくなってきます

時期	子どもの姿	自ら選んで行う活動	学級のみんで行う活動
リズム遊び 4月～5月	二語文を話す 音がすると振り向く 身体の一部を認識する 保育者をじっと見ている		
6月～8月	歌の歌詞をまねる 名前を呼ばれると手をあげて返事をする 音を出すことを喜ぶ 保育者と一緒に走る		
ふし 9月～12月	手をつないで歩く 音楽に合わせて体を動かす 目的まで走りきる 走ったり止まったりできる リズムに合わせて手をたたく		
く 1月～3月	動物、乗り物、キャラクターの表現をする 友達とリズムや歌詞を共有する 知っている歌をうたう 両足でジャンプする 面白そうな動きや擬音を真似る 音楽に合わせて踊る		

3歳児の年間指導計画の作成

グランドデザインを基に、1年をいくつかに分けて、計画を立ててみましょう。  
今回は、「自ら選んで行う活動の場面」、「学級のみんで行う活動の場面」とあえて分けて表してみました。  
3歳児は繰り返すなかで、『やってみようかな』と心が揺れ、保育者や気に入った友達と体を動かしていくうちに、お気に入りの曲ができた、音楽やリズムに合わせて動いたりして、音や音楽への関心がたかまり、自ら取り入れて遊ぶようになってきます

時期	子どもの姿	自ら選んで行う活動	学級のみんで行う活動
リズム遊び 4月～5月	二語文を話す 音がすると振り向く 身体の一部を認識する 保育者をじっと見ている		
6月～8月	歌の歌詞をまねる 名前を呼ばれると手をあげて返事をする 音を出すことを喜ぶ 保育者と一緒に走る		
わらべうた 9月～12月	手をつないで歩く 音楽に合わせて体を動かす 目的まで走りきる 走ったり止まったりできる リズムに合わせて手をたたく		
ボディパーカッション 1月～3月	動物、乗り物、キャラクターの表現をする 友達とリズムや歌詞を共有する 知っている歌をうたう 両足でジャンプする 面白そうな動きや擬音を真似る 音楽に合わせて踊る		

図5 年間指導計画の枠組み

る。記述ができれば、その中の1場面に着目し、グループの中で保育者と子どもにわかれて、模擬保育の練習を行う。

4) 年間指導計画に基づく模擬保育 (20分)

実際の保育現場における様々な季節やあらゆる場面を想定し、保育者役、子ども役にわかれ、幼児の遊びから展開される音や音楽を用いた活動をロールプレイによって5分ずつ発表を行う。また、作成した年間指導計画はOCRを用いてスクリーンに映し、担当箇所以外の指導計画についても受講者間で共有できるようにする。

発表後は、音楽に関わる活動において工夫した点や模擬保育における反省等を各グループが発表し、受講者との質疑応答により、今後の現場で実践につながる情報を共有できるよう配慮する。

IV. 研究方法

1. 対象者

本講座の受講者である正規または嘱託経験3年以内の岡崎市立保育園勤務者73名

2. 質問紙調査

第1回講座の際に事前の質問調査を、2回～4回のあそび講座(音楽)終了後に事後の質問紙調査を行う。なお、質問項目は行動目標の形式で設

定し、質問に対する回答は「とてもできる」「ややできる」「どちらでもない」「ややできない」「全くできない」の5件法で回答を設定した。質問項目を表1に示す。

表1 質問紙調査の質問項目

事前	項目1	日常の保育のなかで、音楽に関わる活動を取り入れることは?
	項目2	音楽に関わる活動を取り入れた指導計画を作成することは?
	項目3	子どもと音や音楽を通して遊ぶことは?
	自由記述	音楽に関わる活動で、困った経験があれば教えてください
事後	項目1	今後の保育において、音楽あそびに関わる活動を取り入れることができそうですか?
	項目2	音楽あそびに関わる活動を取り入れた指導計画を作成することができそうですか?
	項目3	子どもと音楽活動を通して遊ぶことができそうですか?
	自由記述	講習に参加しての気づき、または感想があれば自由に記述してください。

## V. 結果と考察

質問紙調査では、質問項目での有効回答は72名であり、自由記述については、事前57件、事後68件の回答を得た。質問項目における回答人数を表2に示す。

また、統計分析として、「とてもできる」「ややできる」と回答した人をポジティブ群（P群）、「ややできない」「全くできない」と回答した人をネガティブ群（N群）として分類し、Fisher's exact testを用いて事前と事後の変容について検討を行った結果、3つの項目全てにおいて1%水準での有意差が示された（表3）。この結果をふまえ、以下より項目ごとに分析を行う。

表2 質問紙調査の回答人数

	【事前】			【事後】		
	項目			項目		
	1	2	3	1	2	3
とてもできる	8	0	11	24	5	39
ややできる	44	18	41	47	54	33
どちらでもない	9	20	11	1	11	0
ややできない	8	23	7	0	2	0
全くできない	3	11	2	0	0	0

表3 Fisher's exact test の分析結果

	事前	事後	P 値
	P 群 N 群	P 群 N 群	
日常の保育に音楽活動を取り入れる	52 11	71 0	0.0001 **
音楽活動の指導計画の立案	18 34	59 2	0.0000 **
子どもと音楽あそびを通して遊ぶ	52 9	72 0	0.0006 **

\*\* ;  $p < 0.01$

### 項目1：日常の保育のなかで、音楽に関わる活動を取り入れることは？

事前では「ややできない」「全くできない」と答えた受講者が11名あった。自由記述を参照すると、「子どもが初めて歌う歌をピアノに合わせて歌うときの指導の仕方がわからないことがあ

る」や「ピアノが苦手。弾きながら歌うのが難しい」という記述がみられたことから、ピアノを用いた幼児曲の弾き歌いに対する苦手意識が、音楽に関わる活動を取り入れることへの苦手意識に繋がっている様子が窺えた。

一方、事後の「日常の保育のなかで、音楽に関わる活動を取り入れることができそうですか？」との質問に対しては、1名を除く71名の受講者が「とてもできる」「ややできる」と回答した結果となった。講座の中では音や音楽に関わる活動は弾き歌いだけではなく、日常の生活や遊びの中にあることを、講座設計を通じて伝えることを意図してきた。ピアノに対する苦手意識がある人も含めて、事後にはできそうという意欲が有意に高まったため、講座設計への一定の評価がなされたといえる。

### 項目2：音楽あそびに関わる活動を取り入れた指導計画を作成することは？

事前の調査では、「とてもできる」と回答した受講者は0名。「ややできない」「全くできない」を選んだ受講者が合計34名、「どちらでもない」を選んだ人も加えると、75%の人が指導計画の作成について、できる自信がないことが明らかとなった。項目1、項目3と比較しても苦手意識をもつ受講者が多いことから、保育士初任者は活動よりも指導計画に対しての苦手意識が強いことが示された。

一方、事後の結果では、「とてもできる」「ややできる」と回答した受講者が59名（約82%）と事前と比較して大きく増えた結果となった。事前課題として、図2で示したワークシートに日常の音楽あそびの実践を記入してもらい、それをまとめたワークシート集を参考にしながら、グループでのディスカッションを行い模擬保育につなげたことが、年間指導計画を考える素になったのではないだろうか。また、年間指導計画の枠組み（図5）を示し、子どもの発達に応じた姿を頭で考えるだけでなく、模擬保育としてグループごとに発表したことも、生活や遊びの中での音や音楽を用いた活動を具体的にイメージすることに繋がったと考える。自由記述からも「難しいと思ったけれど、他のグループの発表を見て、取り入れ方のイメージが持てた」という記述が見られたことから、年

間指導計画と、日常の実践や子どもの姿とを繋げてイメージすることが、指導計画作成に対して自信が高まる一因となり得る可能性が示唆された。

### 項目3：子どもと音楽あそびを通して遊ぶことは？

保育者自身が音楽あそびを通して、子どもと遊ぶことができるか？という問いに対して、事前調査では「全くできない」「ややできない」を選んだ受講者が9名（約13%）、「どちらでもない」を選んだ受講者は11名（約15%）いたが、事後調査では、全員が「とてもできる」「ややできる」を選択した結果となった。Fisher's exact testの検定結果からも、事前と事後のポジティブ群とネガティブ群との間で、1%水準で有意差が出たことから、本講座を受講することにより、子どもと音楽あそびを通して遊ぶことができるという自信が有意に高まったことが示された。

自由記述では「音楽ということを難しく捉えていたが、普段の生活の何気ない言葉、動きの中から音あそびが生まれると感じた」「子どもの普段の生活や姿から拾っていくことの大切さを改めて感じた」「音楽あそびを難しいものと捉えず、簡単なものから普段の保育に取り入れていきたい」「音楽といわれると歌う、ピアノを弾くなど一般的にイメージすることを思っていたが、今回この講座に参加してすごく音楽の捉え方がわかりました。各グループの実演を見てさらに意味を深く知れ（原文ママ）、さっそく取り入れてみようと思った」などという記述がみられた。このことから、「音楽あそび」に対する捉え方をピアノや弾き歌い中心の活動から、生活や遊びの中から、子どもの身の回りにある言葉や音、音楽を拾い上げることも含めるように意識することで、「音楽あそび」をより広く捉えることができ、保育に繋げていく自信が高まることが示唆されたといえる。

## VI. まとめと課題

本研究は、生活や遊びの中での音や音楽に着目し、子どもの表現活動を支援するあり方について検討することを目的としておこなった。具体的には、保育士初任者を対象とした研修「岡崎市定期講座講習あそび講座」において、生活や遊びの中での音や音楽に着目して講座設計を行い、音楽あ

そび講座が、受講者の保育における音楽に関わる活動に対する意識にどのような変化を与えたのかについて分析を行った。

検証の結果、講座を受講することで質問紙調査の3項目「日常の保育に音楽に関わる活動を取り入れること」「音楽に関わる活動を取り入れた指導計画の立案」「子どもと音楽あそびを通して遊ぶこと」に対する自信が有意に高まったことが明らかとなった。また、自由記述の内容から「音楽あそび」に対する捉え方をピアノや弾き歌い中心の活動から、生活や遊びの中から、子どもの身の回りにある言葉や音、音楽を拾い上げることも含めるように意識することで、「音楽あそび」をより広く捉えることができ、保育に繋げていく自信が高まることも示唆された。これらにより、生活や遊びの中での音や音楽に着目し、子どもの表現活動を支援する力を育成することを意図した講座設計については、一定の有効性が示されたといえる。

一方で、事後の自由記述では「運動会や発表会につながる活動のアイデア等が知りたい」「音楽をつかったあそびをいろいろ紹介して欲しい」「こんな時にはこんな歌が使える、というようなレパートリーを知りたい」といった、直接的に明日の保育で使うことのできる音楽あそびのネタを求める記述も少なからずみられた。これは、音楽講座が目的とした「①保育現場における音楽に関わる活動をふまえて、保育者が創造性をもって子どもの音楽表現を引き出す活動について、理論と実践を結びつける」ということが十分に伝わっていなかったためと考えられる。今後、グランドデザインを踏まえて保育をおこなっていくことの重要性と、自ら考え学び続ける保育者となることの大切さについて、第1回目の講座の最初に、より明示的に伝える必要がある。

また、本研究で目的とした生活や遊びの中での音や音楽に着目し、子どもの表現活動を支援するあり方は、今後の保育者養成課程における教科の内容としても取り入れていく必要がある。今後は、本研究の知見を活かし、保育者研修の講座設計の改善や、保育者養成課程における授業設計のあり方も検討していきたい。

## 謝辞

本研究の実施に当たり、質問紙調査にご協力頂

きました、岡崎市職員の方々、また「岡崎市定期講座講習」の運営統括をしてくださった岡崎女子大学矢藤誠慈郎先生、大岩みちの先生に深くお礼申し上げます。

### 引用文献

- 1) 幼児教育部会『幼児教育部会の審議の取りまとめについて（報告）』（2016）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/1377007.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/1377007.html)  
（アクセス日：2017年1月6日）
- 2) 無藤隆監修・浜口順子編者代表『事例で学ぶ保育内容領域表現』萌文書林（2008）, pp.31
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領』（2014）, pp.224

### 参考文献

- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』（2008）
- ・厚生労働省『保育所保育指針解説書』（2008）
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領』（2014）

### 執筆分担

- ・滝沢 I章, III章（2-3, 2-4）, IV章, V章
- ・平尾 III章（1, 2-2）
- ・北浦 II章
- ・西川 III章（2-1）